北越

編

農商務省圖書
十三年六月廿五日
第一七二
七四號冊

太政官文庫
和書門
一一六〇函
七冊架

内閣文庫
一一六〇號
七冊
一七五函
五架

内閣文庫
番號 和 11160
冊數 7 (1)
函號 175 80

国立公文書館
National Archives of Japan

越後 鈴木牧之撰
江戸 京水百鶴画

北越雪譜 初編 三卷

京山人百樹 刪定

江戸書肆 文溪堂梓行

北越雪譜 敘

世之農商而嗜文雅者或不知耶以文雅為文雅徒企羨顔士畏客之風標沈酣文酒流連忘月而置生計於不問此傾産業者間亦有之是豈嗜文雅罪哉其人特自取之耳矣鈴木牧之翁者北越塩澤之老農也性嗜文雅而能尚節俠抑騎情不能誦讀於經営之中而務鉛槧於會計之餘以交遠近之墨客嘗以堪恐之二字

明治九年閲了

銘自守以故其名久布遠邑而生業亦因以致豐饒矣嗚呼若翁者不徇文雅之名而能務其實者非耶余於翁得一面識於江戸而後特以書訂交者有年于此今茲乙未遠寄示雪著北越雪譜者六卷併囑以校訂時方盛夏火威如燬乃就小囱下試繙可閱之則越雪恍如耳目間驟眉之夢目見紛霏之影使人頓忘輒中之苦讀到積疊埋屋行旅不通人以窮乏柴米或不給則澹然寒顫肌膚而之栗生矣余因以謂

孰袴輕薄子第當微雪俄下紛紛霰空之際彫鞍寶勒飛玉蹄於郊坰或氈帽棕鞋蹈瓊瑤於衢衢或亟舸載妓或高樓呼酒直以奢勝遊樂事曾不知飢寒為何物若今甚人淺世書依以想其稚之凍餒之苦狀乎然則安安不有能有恪非宴安之公共而戚戚焉之心者哉寧梓而行之乎有裨益世教蓋非鮮小也間者

稍得秋涼聊削藁駁雜訂方畢者三巻書賈
文溪堂見而喜之謀梓行之余寄簡以告翁〻
曰雪中閉戸漫筆豈敢欲梓耶於是予不復俟請
之於翁拳以付之翁之嗜文雅而能務其實必
必笑頷之而已翁之稿本國字之間僅字者嘗
不添音訓之假名余今盡添之以便童蒙云爾
天保六年乙未秋菊月
江戸　京山人百樹并書

此書の稿本図ハ別冊とし或ハ其説ニ大図を描て添るもあり
皆牧之翁ノ自筆の草画也毋拳梓行の為ニせゞ繕ハ図ニ
渋鐵重複あるを今梓ニ臨て至図の過半を省き月を新に
写されを存して巻中ニ夾刺するハ単冊ニ尽し難を以也則ハ
是刪定の為ニ係る所也余嘗て原図を閲するニ雪中の諸状
混錯を走墨ニ点して通暁し難きかを靴中の詹岸ハ如何如
其唯翁ノ草図ニ倣ひて喜ノ描する而已或原図の梓ニ入るもハ則
ち或加ふ或説有て図書きかの其説ニ據て其図を作りもあり蓋余素
越地を踏ず越雪の真事ニ於て茫然たり故ニ雪図ニ於て達濶なる
知るべ〻ず其説を編者ニ駑ちと勿れ　乙未秋　京山男少年　京水百鶴

枕間簌〻
雪華飛天
曙色来白
四囲茫絶
樵林人不見風嘶猟径犬
空飢懶乗冷乾促寄履屐
掛蓑充集敵衣屋裡要知
春色到墻頭立存早梅蕾

右賦小越雪景

江戸 醉石山人禄題

北越雪譜初編 全上中下 巻之上目録

地氣雪と成る弁
雪の深浅
雪の用意
雪の堆量
雪を拂ふ
雪道
胎内潛
熊捕 並白熊
雪中の虫
雪中の火
雪頽
雪の形状
雪意
初雪
雪竿
沫雪
雪蠶
雪中の洪水
熊人を助
雪吹
破目山

○通計二十一條

北越雪譜初編巻之上

越後塩澤 鈴木牧之 編撰
江戸 京山人百樹 刪定

○地気雪と成る弁

凡天とは形なくして下す物○雨○雪○霰○霙○露ハ地気の粒珠なる所霜ハ地気の凝結なる所冷気の強弱ふるて其形を異ふなるのみ地気天ふ上騰形を為て雨○雪○霰○霙○霙と為ども温気をうくれバ水となる水ハ地の全體なれバ元の地ふ飯なり地中深けれバかゝる温気あり地温なる故得て気なる吐天ふ向て上騰る人の気息のごとく昼夜片時も絶ることなく天も又気なる吐て地ふ下す是天地の呼吸なり人の呼と吸とのごとく天地呼吸して萬物を生育す天地の呼吸常なる失ふ時ハ暑寒時ふ應せず大風大雨其餘さまゝの天変あるハ天地の病なり天ふ九ツの段あり地を九天とふ九段の内最地ふ近き所を太陰天とふ地球を高さ四十八万二千五百里とする太陰天と地との間ふ三ツの際

あり天ハ近を熱際とのへ中を冷際とのへ地ハ近を温際とのへ地気ハ冷際を限りとして熱際ハ至らず冷温の二段ハ地を去ること甚だ遠くして冨士山ハ温際を越て冷際ハちくきゆゑ絶頂ハ温気通ぜざるゆゑ艸木を生ぜず夏も寒く雷鳴暴雨を温際の下ハ云ふ雷と夕立ハきえさの雲ハ地中の温気より生ずる物ゆゑハ其起る形ハ湯気のごとく水沸て湯気の起と同じく雲温ゆる気ハ汲て天ハ升りかの冷際ハ消て露と成るが如し冷際ハいたるぞ雲散して雨ハ成るなり

さて雨露の粒珠ハ天地の気中ハ在る物汲てこ艸木の實の圓ハ成うしゆハざるも気中ハ生ずるゆゑ雲冷際ハ成て雨と成るなり時天寒甚しく時ハ雨氷の粒となりて降り下る天寒の強と弱とハよりて粒珠の大小ハ成為す是を霰と雪とをも雷ハ夏ありその弁地の寒強き時ハ地気形ハ成るなり天ハ升る微温湯気のごとく天の曇ハ是こ地気上騰ること多けれバ天灰色をなして雪ゆきとハ暴しる雲冷際ハ到り先雨となる此時冷際の寒気雨ハ氷すべハ力たゝざるゆゑ花粉を為して

下ハ是雪こ地寒のよわきとつよきとハよりて氷の厚と薄との如し天ハ温冷熱の三際あるハ人の肌ハ温ハ肉ハ冷ゆる臓腑ハ熱ゆること同じ道理こ気中萬物の生育悉く天地の気格ハ随ふゆゑこ是余ゞ發明ハあらず諸書ハ散見しる古人の説こ

○雪の形

凡物を視るハ眼力の限りあり其外を視ること能ハず譬ハ人の肉眼を以雪ハ成るとハ一片の鵞毛のごとくゆゑども数十百片の雪花ハ成併合て一片の鵞毛を為こ是を驗微鏡ハ照し視るハ天造の細工ゆゑる雪の形状奇こ妙こゆゑ下ハ図せるが如し其形の齊しからざるハかの冷際ハ於て雪と成る時冷際の気運ひとしからざるゆゑ雪の形気ハ焦じて同じからざるこ雖ども肉眼のおよぶべき至微物ゆゑ昨日の雪も今日の雪も一望の白糢糊を為のこと下の図ハ天保三年　許鹿君の高撰雪花図説ハ在る所雪花五十五品の内ハ謄写ゆゑ雪六出ハ成為　御説ハ曰「凡物方體ハ四角ゆゑ必八を以て一ハ成圍こ円體ハ九を六ハ成以て一ハ成圍む定理中の定数誣べからず」云こ雪を六

の花とのふるゆ　御説を以ちるべし　愚按ふ円ハ天の正象方ハ地の実位之天地の気中ふ活動もる万物悉く方円の形式失ふ故その一式以いへ人の體方ふして方ならず円くして円くならず是天地方円の間ふ生育ゆるふ天地の象式ゆるもぞるゆ子の親ふ似るふ相同じ雪の六出もる所以ハ物の負長数ハ陰半数ハ陽之人の体男ハ陽なるゆ九出し　頭・両耳・鼻・両手・両足・男根　女ハ十出も　男根・両乳あり　九ハ半の陽十ハ長の陰之ちなるとも陰陽和合して人式為ゆ男ふ無用の両乳ありて女の陰ふかくどり女ふ不用の陰舌ありて男ふかくどる気中ふ活動萬物此理ふ漏ざるゆ雪ハ活物ふあらざるとも変ぜる所ふ活動の気あるゆ六出しる形の陰中或陽ふ象る円形を具へるもあり水ハ極陰の物なれども滴もとる時ハ円形を落るところふ活く萌ある物ふ陰ふして陽の円をうるぶるゆ天地気中の機関定理定格あるゆ奇こ妙こ愚筆ふ尽しがたし

○雪の深浅

左傳ふ隠公八年平地尺ふ盈を大雪と為と見えるハ其国暖地なるゆ唐の韓愈雪を豊年の嘉瑞とふ〳〵も暖国の論さなれども唐土ふも寒国ハ八月雪降ゆ五雜組ふ見えるゆ暖国の雪一尺以下なるゆ山川村里立地ふ銀世界をなし雪の飄々翻々なるを観て花ふ諭へ玉ふ比べ勝望美景を愛し酒食音律の楽を添へ画ふ寫し詞ふつゞ称翫もるハ和漢古今の通例なれども是雪の浅き国の楽なる我越後のごとく年毎ふ幾丈の雪を視て何の楽きゆるもあらん雪の為ふ力を尽し財を費し千辛万苦もるゆ下ふ説く所を視ておのひもるゆし

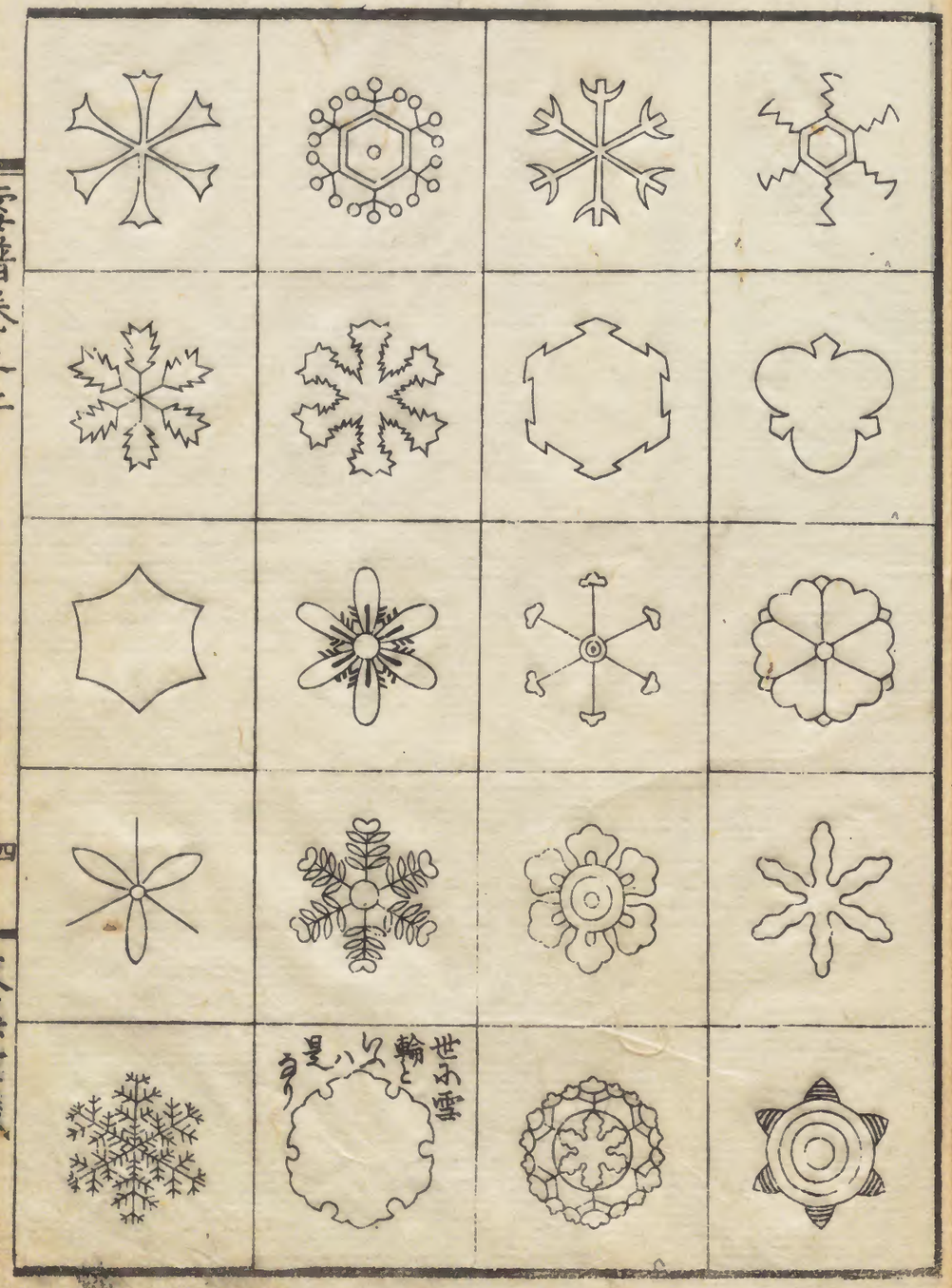
○雪意

我国の雪意ハ暖国ふ均しからぬ故ふ九月の半より霜を置て寒気次第ふ烈しく九月の末ふ至ハ殺風肌を侵て冬枯の諸木葉を落し天色霽として日の光紙看ざるゆ連日是雪の意之天気朦朧もるゆ数日ふして遠近の高山ふ白を点じて雪を観せしむ故ふ里言ふ嶽廻とふ又海ある所ハ海鳴り山ある処ハ山ある

○験微鏡を以て雪状を審に視る図

此図ハ雪花図説の高撰中に在る所五十五品の内に時寫を是則江戸の雪と万里を隔てる紅毛の雪もことに同じ元物ある事高撰中に詳と以て天の无量なるを知べし

天機元〻百花中六出奇葩別示工
詳雪苟為窮松冊玆抽珍図厚
喜風　題雪花図　牧之



遠雷の如くあるは紙里言に胴鳴りとのことを聞くに雪の遠くざるを考る年の寒暖に つるに時日はさだまらざれども概ねたけまりどうりは秋の彼岸前後にあり毎年かくのごとし

○雪の用意

前に云るごとく雪降んとする紙量り雪に損ぜざるを為に屋上に修造を加へ梁柱廂家の前の屋翼を里言に廊架なり其外もべて居室に係る所力弱ハことを補ふ雪に潰るるを為に庭樹ハ大小に随ひ枝の曲ハ枝ハすべて縛束揖丸太又ハ竹を添へ杖とす枝を強くせむ雪折をふせぐ冬草の類ハ荒筵を以覆ひ包む井戸ハ小屋を懸厠ハ雪中其物を荷ものに備をなす雪中ハ一点の野菜もなければ家内の人数に応じ雪中の食料を貯ふ又土中に埋ふ又ハ桶に入れ其外雪の用意に種々の造作をなすも筆に尽しがたし

○初雪

暖国の人の雪を賞翫するハ前に云るごとし江戸に雪の降ざる年もあれば初雪ハことさらに美賞し雪見の船に哥妓を携ハ雪の茶の湯に賓客を招き青楼ハ雪に居続の媒とす酒亭ハ雪を来客の嘉瑞とす雪の為に種々の遊楽をなす枚挙げがたし雪を賞するの甚しきハ繁花の春に勝る所なし雪国の人ことさらに見ることを聞て羨ざるハなし我国の初雪を以て吉兆とし楽と苦と雪泥のちがひこそもくに越後国ハ北方の陰地なれども一国の内陰陽を前後にいんとうるとぞ天ハ西北に低く地ハ西北を陰とし地ハ東南に足す故に東南を陽とす越後の地勢ハ西北ハ大海に対して陽気と東南ハ高山連りて陰気とを含む西北の郡村ハ雪浅く東南の諸邑ハ雪深し是陰陽の前後なるに似たり我住魚沼郡ハ東南の陰地にて巻機山・苗場山・ハ海山・牛ヶ嶽・金城山・駒ヶ嶽・兎ヶ嶽・浅艸山等の高山其餘他国に聞えざる山く波濤のごとく東南に連り大小の河くも縦横をなす陰気充満して雪深き山間の村落なれば雪の深をなべて冬八日南の方を周ぬ北国ハ寒く南ハ暖なるを同じ道理と我国初雪を視るに遅と速とハ

其年の気運寒暖ふつゝて均らゝゞとらゝゞども初雪ハ九月の末十月の首ゐわり
我国の雪ハ鵞毛をうゝゞ降時ハうゝゞ粉砕をうゝた風又ゝをを助く故ゐ一昼夜
ゐ積所六七尺より一丈ゐ至る時もあり往古より今年ゐいゝるゝゞ此雪此国ゐ降ぎるゐ
ゐ〜ゝゞゞば暖国の人のごゝ〜初雪を覩て吟詠遊興のゝゝ〜ハ夢ゐもちゝず今年も
又地[illegible]中ゐ在るゐかと雪紙悲ハ邊郷の寒国ゐ生ゝる不幸とゝゞ〜雪を観て楽む
人の繁花の暖地ゐ生ゝる天幸を羨ごゝんや

○雪の堆量

余ゞ隣宿六日町の俳友天吉老人の話ゐ妻有庄ゐわゝゞ〜頃閑〜ゐ千隈川の邊の雅
人初雪より天保五年十二月廿五日までの間雪の下る毎ゐ用意をする所の雪を尺をゝりつて
量り〜〜ゐ雪の高さ十八丈ありゝ〜とゝりてゝゞ此話雪国の人もゝゝ信じゞゝくゝ〜ゝゞども
ゝゝ〜思量ゐ十月の初雪より十二月廿五日までゝ、ゝゝをの日数八十日の間ゐ五尺づゝの雪ゐゞ出
四丈ゐいゝるゞ〜随て下ハ随て掃ゐ処ハ積でゝゝるゐゐ〜又地ゐわゝゞ減もするゝ

かゝをゝりつて是をゝりゝゞゝ我国の深山幽谷雪の深ゐゝより多ゝゝゞ天保五年ハ我国
近年の大雪ゐ〜〜ゐ右の話誠ゐ〜〜ゞ

○雪竿

高田御城大手先の廣場ゐ木を方ゐ削り尺を記〜て建のゐ是を雪竿とゝゞ長一丈ゝ
雪の深浅公税ゐ係ゝを以てゐゝゞ〜高田の俳友楓石子よりの吾翰ゐ天保五年の仲冬雪竿を
ゝゝゞ当地の雪此節一丈ゐ餘ゝゝとゝゞハ未ゝゝり雪竿とゝゞゞ越後の事とゝて俳
句ゐもゝゝゝゝゝゞ此国ゐ於て高田の外无用の雪竿を建る処黄ハゝ〜ず今ハゝ〜風
雅をゝつて我国ゐ遊ぶ人雪中を避て三夏の頃此地を踏ゐゝ越路の雪をゝ〜ゞ然るゐ
越路の雪を言の葉ゐ作意ゐゝたゞゐゝゐゝゝゝて我国の心ゐハ笑ふべきゞ多〜

○雪を掃ふ

雪を掃ゐ落花をゝらふゐ對〜て風雅の一ゝと〜和漢の吟詠ゐもゝゝゝゝゝゝゝども
かゝる大雪をゝらふハ風雅の狀ゐわゝず初雪の積りゝゝをそのまゝゐおけば再び下る

雪を添へて一丈ばかりもあるべし一度降ば一度掃ふ雪減ければ是を里言に雪掘といふ土を掘ごとくもるゆゑに斯いと掘ざるべし家の用路を塞ぎ人家を埋て人の出べき処もなく力強家も幾万斤の雪の重量に推碎んをかなしむゆゑ家として雪を掘ざるハなし掘るゆハ木ゆゑ作りなる鋤を用ふ里言にこれを掘といふ則木鋤と掘とのふ木をもつて作る木質軽強にして折るゆゑなく且軽し形ハ鋤に似て双廣し雪中第一の用具なるべし山中の人ここを作りて里に賣家毎に貯ざるハなし雪を掘る状態ハ図にわかるべし

ゲ如し掘る雪ハ空地の人に妨なき処へ山のごとく積上るこれを里言に掘揚といふ大家ハ家夫を尽くして力たらざるゆゑに掘夫を傭ひ幾十人の力を併て一時に掘尽さる事を急に為もハ掘る内ゆゑ大雪下るべ空地に堆く人力にあたらざるゆゑ掘る処図ゆハ人数を右ハ大家の暑くして掘けり

るをもつて小家の負しきハ掘夫をやとへば費わるべ男女をいはず一家雪をわる吾里に

くぎるゆゑ雪ゆき処ハ皆然り此雪いくばくの力をつかひいくばくの銭を費し終日わりなる跡へその夜大雪降り夜明て見るべ元のごとしかる時ハ主人ハさらに下人も頭

を低て歎息をつくのみ大低雪ふるごとに掘ゆゑに里言に一番掘二番掘とのふ

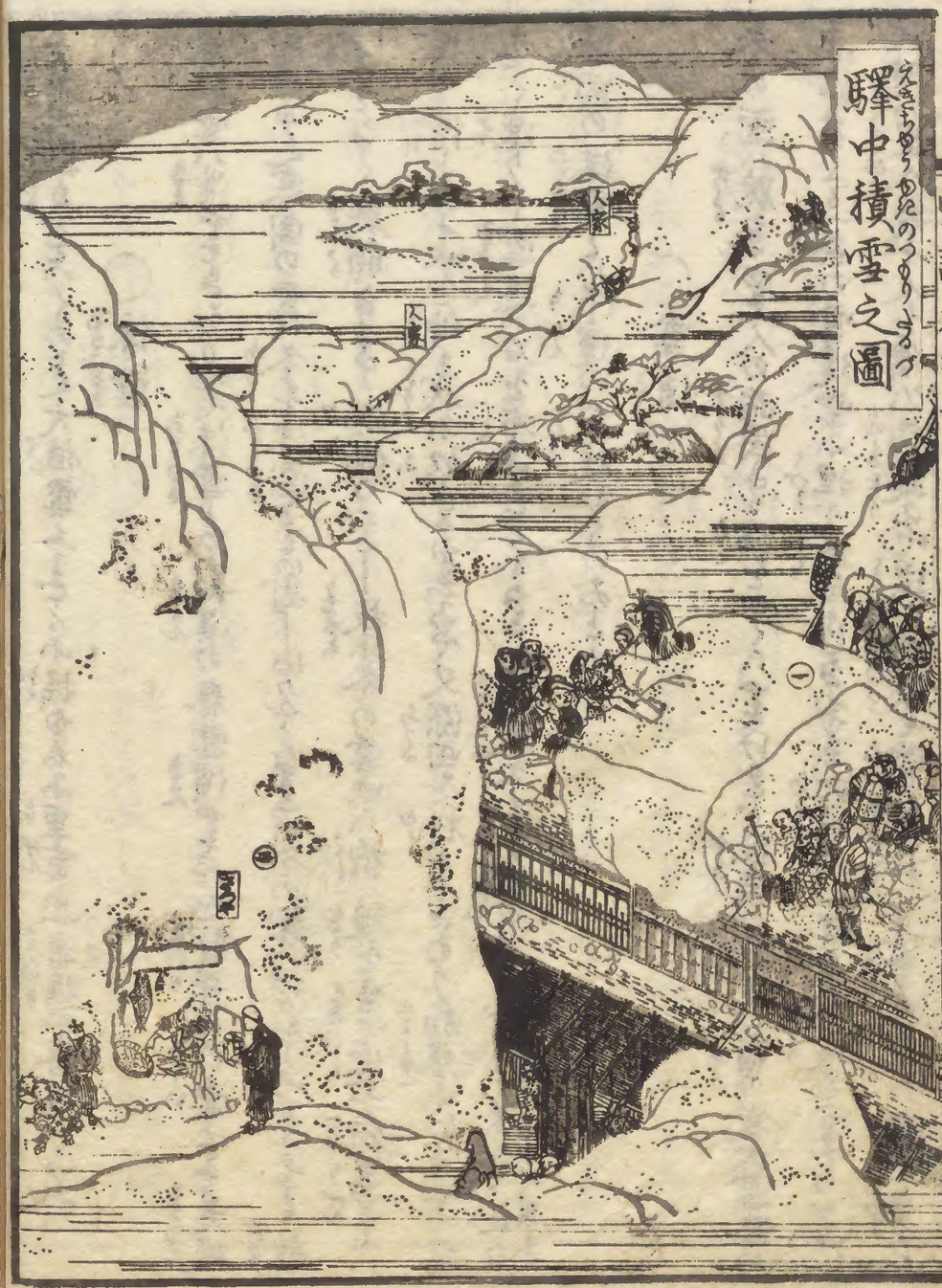
○沫雪

春の雪ハ消ゆきをりつて沫雪とのふ和漢の春雪消ゆきを詩哥の作意ここに是暖国のゆゑ寒国の雪ハ冬を沫雪ともいへども冬の雪ハいかにとつるべ冬の雪ハいかにとつるべ凝凍こほるゆゑ脆弱なるゆゑ淤泥のごとし故に冬の雪中ハ機縄を穿て途を行里言にハ雪を漕とのふ水を渉る状に似るゆゑなり又深田を行ごとあり初春に入ゆゑ雪悉く凍りて雪途ハ石を布るごとくなるべ往来冬よりハ易し暖国の沫雪ハ気運の前後かくのごとし

○雪道

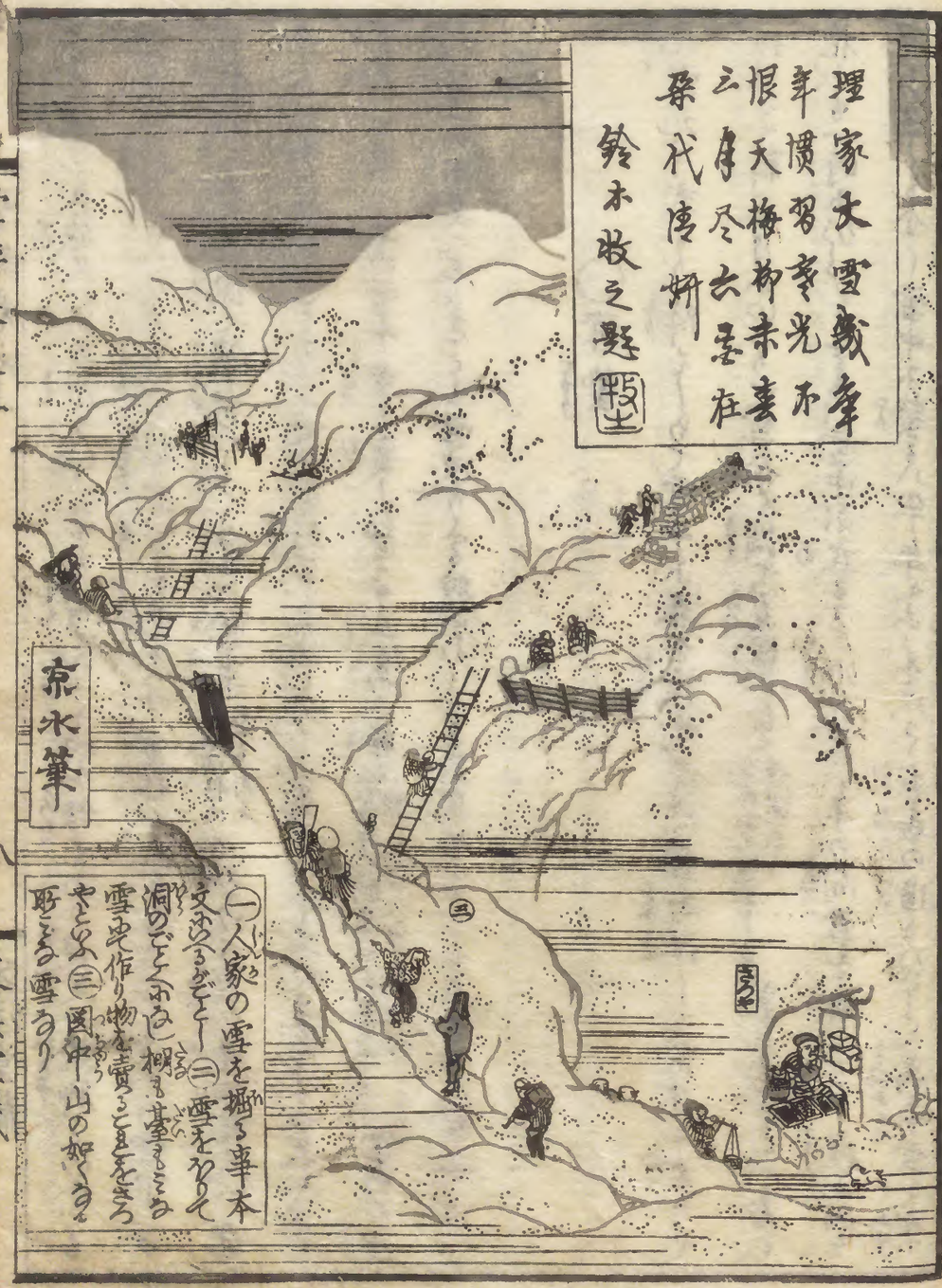
冬の雪ハ脆弱ゆゑ人の蹈固る跡をゆくハ往来の旅人一宿の夜大雪降ハふかくなる一条の雪道雪に埋り途をうしなふゆゑ郊原にいたりてハ方位をくらし此時ハ里人幾十人を傭ひ機縄ゆゑ道を蹈開せ跡に随て行こ費幾緡の銭を費を

驛中積雪之圖



理家大雪歲年慣習豪光而
恨天梅柳未妄
之春尽去是在
梁代唐州
鈴木牧之題

京水筆



(一)人家の雪を掘る事本文ふるごとし (二)雪をかりて洞のごとくなる棚も甚もこれ雪を作り物を貴ることをさろやとなり (三)國中山の如くなる野こえる雪なり

ゆゑ貪しき旅人ハ人の道をひらくを待て空く時を移もあり健足の飛脚といへども雪途を行ハ一日二三里ハ過ぐ稀ゆゑ足自在ならず雪膝を越ゆるゆゑ冬の雪中一ツの歎難き春ハ雪凍て鏃石のごとくゆゑハ雪車又雪舟の字を以て重を乗る里人ハ雪車ハ物をのせおのゆゑものりて雪上を行ふ舟のごとくゆゑ雪中ハ牛馬の足立ざるゆゑ雪車を用ふ春の雪中重を負しむるゆゑ生馬ハ勝る雪車の制作別ハ記を形大小種々あり大ゆゑを徴羅しふ雪国の便利第一の用具なれども雪凍りる時ハわるゝゆゑハ用ひず一ゆゑハ里人雪舟途と唱ふ

○雪蟄

凡雪九月末より降そめて雪中ハ春を迎正二の月ハ雪尚深し三四の月ハ至りて次第ハ解五月ハひるて雪全く消て夏道となる年の寒暖ハ四五月ハひるゆゑハ春の遅速あり花ども一時ハひらくゆゑハ雪中ハ在るゆゑ凡八ヶ月一年の間雪を看ざるゆゑ僅ハ四ヶ月ゆゑども全く雪中ハ蟄ゆゑハ半年ゆゑを以て家居の造りハさらゝ萬事雪を禦ぐを専とし財を費力を尽すゆゑ紙筆ハ記しがたし農家ハとゝまり夏の初より秋の末までハ五穀を收るゆゑ雪中ハ稲を刈ゆゑあり其忙きゆゑの千辛万苦暖国の農業ハ比をもて百倍ゆゑ雪国ハ生る者ハ幼稚より雪中ハ成長ゆゑ雪中の辛苦を知らざるゆゑ雪を雪とも思ハざるハ暖地の安居を味ざるゆゑ女ハさらゝ男も十人ハ七人ハ是ゆゑ住ハ都として繁花の江戸ハ奉公ゆゑ年ありて後雪国の故郷ハ皈る者ゆゑも又十人ハ七人ゆゑ胡馬北風ハ嘶き越鳥南枝ハ巣くふ故郷の忘がたゆゑハ世界の人情ゆゑ雪中ハ廊下ハ江戸ハ雪吾を掃る下ハ雪吹を防ぐ窗も又店下てゆゑを用ふ雪ふるゝる時ハ巻て明をとる雪下ゆゑ厳ゆる時ハ積る雪家を埋て雪と屋上と均く平ハなり明のとるゝべき処なく昼も暗夜のごとく燈火を照して家の内ハ夜昼をわかつゝ漸雪の止る時雪を掘て僅ハ小窗をひらき明をひく時ハ光明赫奕たる佛の国ハ生るゝゆゑ此外雪篭りの艱難ゆゑ枚挙あるゆゑ鳥獣ハ雪中食无をもて雪浅き国へ去るゆゑ一定なるゆゑ雪中ハ篭り居て

朝夕をゐもの八人と熊犬猫ん

○胎内潜

宿場と唱る所八家の前ゐ庇を長くのべて架る大小の人家をさくかくのごとく雪中八さゝ平日も往来ともでゐとりて雪中の街八用ゐる如くゐまゝ人家の雪をとゐ積次第ゐ重て両側の家の間ゐ雪の堤を築ゐる如くとゐ於て所ゝゐ雪の洞をひらき庇より庇ゐ通ふことを里言ゐ胎内潜とゐふ又間夫とも小間夫とハ金掘の方言ゐゐを借て用ふるゝ猫夫の本義八妻妾の奸淫をゐの

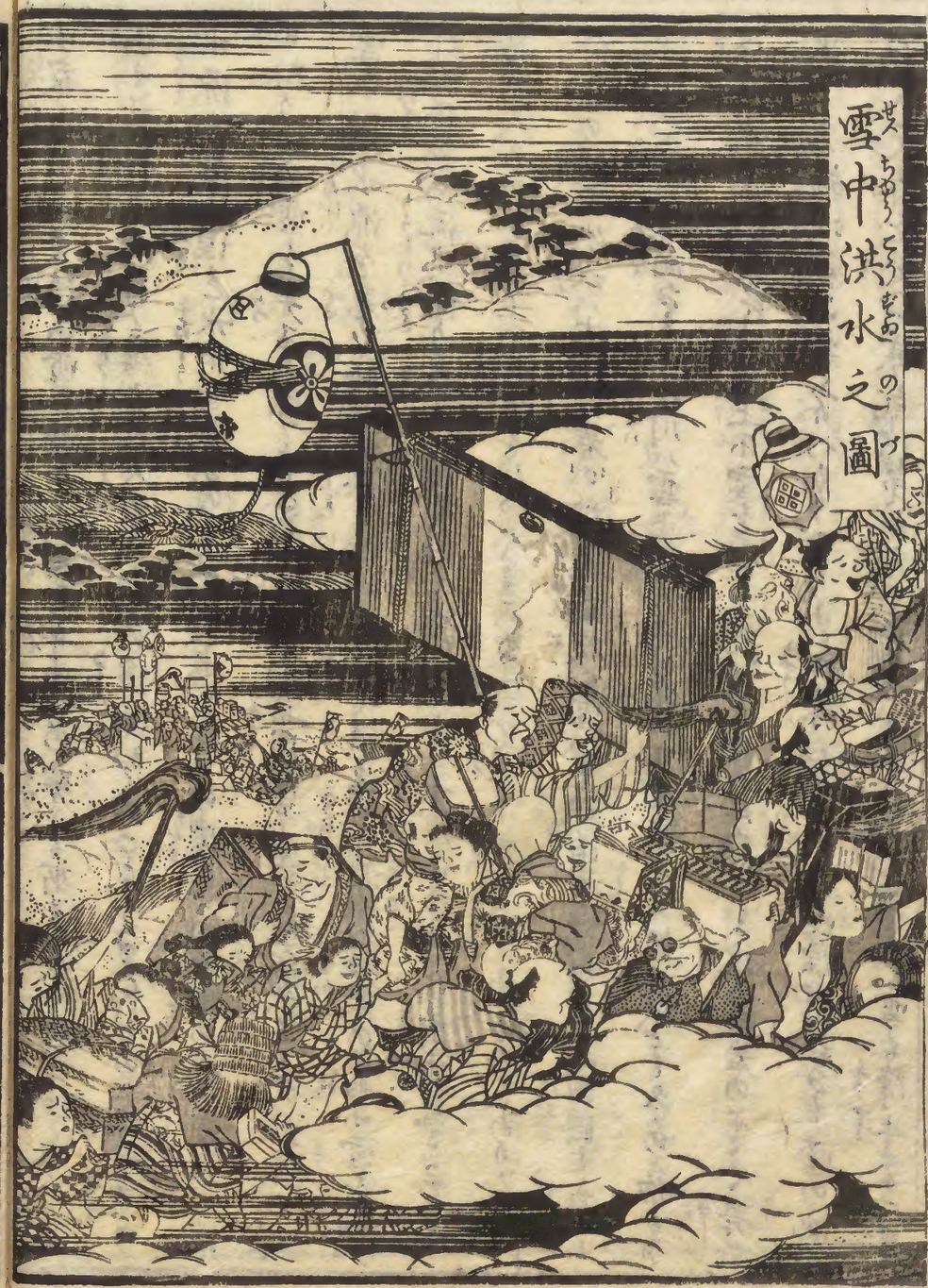
宿外の家の続ざる処八庇ゐひきバ高低をゐ〳〵るかの雪の堤を往来ともに人の足立ざる処わきバ一条の道を開き春ゐいゝり雪堆き所八壇層を作りて通路の便とゐ形(へ)匣階のごとく所の者八ことを登下もるゐ脚ゐ慣て一歩もわやまゐるゐ〳〵他国の旅人ゐバ怖ゐ〳〵移歩かゝて落る者わりかゐまバ雪中ゐ身を埋む視る人八ことを笑ひ落るものハことを怒るかゝる難所を作りて他国の旅客を労ハしむるゐ求ゐる形為ゐわゝゐ此雪を取除とゐるゐ人力と銭財とを費ゐ為ゐす導八壇状作りて途を開くゝゝ初雪より歳を越て雪消るまでゐゐ繁細ゐ記さバ小冊ゐ尽しがたゝゐ省てゐるゐ事甚多し

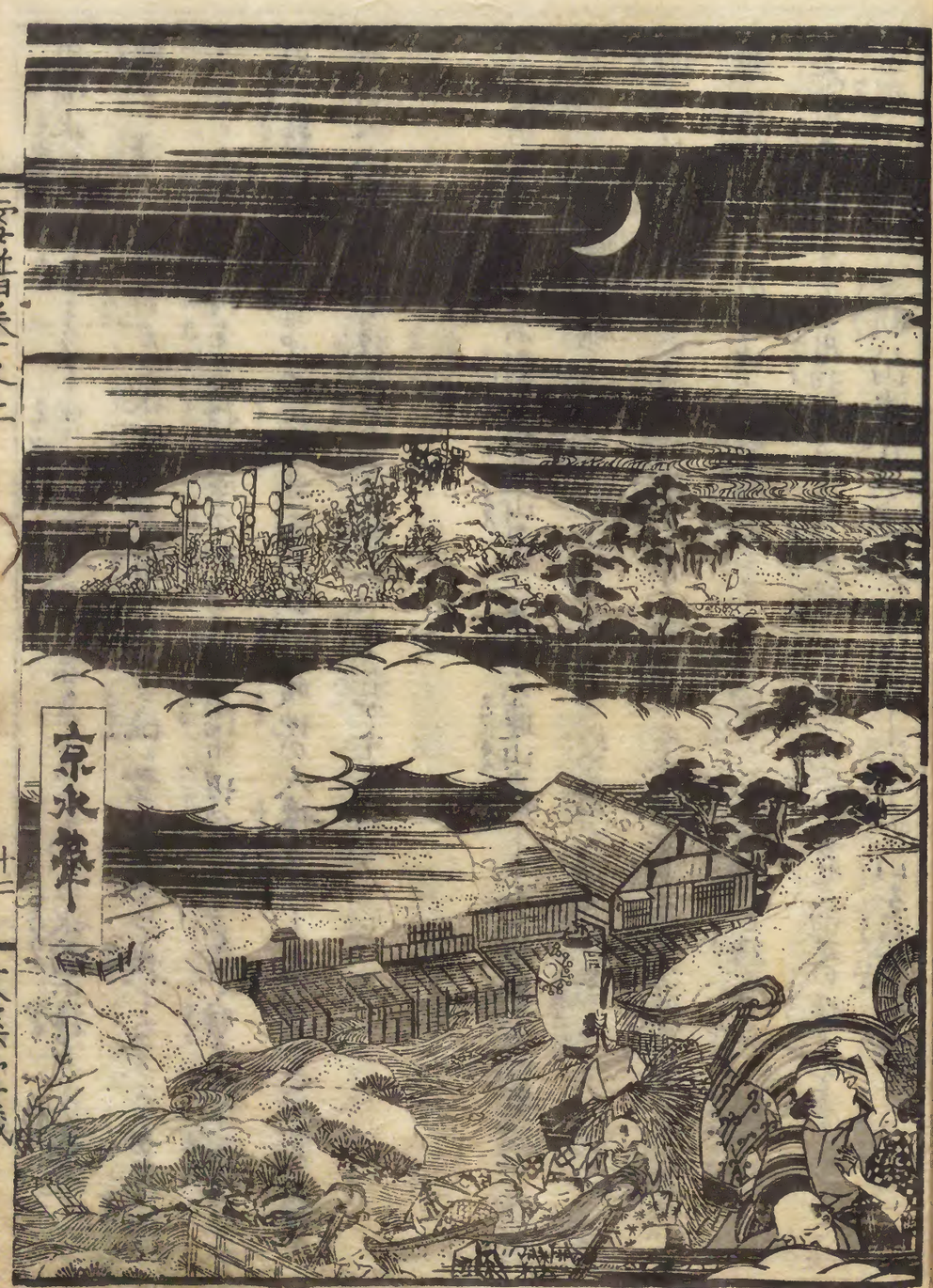
○雪中の洪水

大小の川ゐ近き村里初雪の後洪水の災ゐ苦むゐあり洪水を此国の俚言ゐ水揚とゐふ余一年関とゐふ隣驛の親族油屋が家ゐ止宿せし時頃八十月の末ゐゐゐ雪八九尺つもりゐるをゐゐ〳〵夜半ゐいとりて近隣の諸人呼び呼ハりて立駆ぐ声ゐ聯を驚し云ハ何ゐゐやらんと胃もをどりて卧ゐる一間をゐもてひきバ家の主両手ゐ物を提水わゐりゐゐ〳〵裏の掘揚(立退の)とゐひきて持ゐる物を二階(運びゐく)勝手の方(立ゐでゐゐゐ家内の男女狂気のごとく駆まゐりて家財を水ゐ流さゞと手当をゐゐ取退る水八低ゐ随て潮のごとくゐりきゐり已ゐ席を浸し庭ゐ滋る次第ゐ積ゐる雪所として雪ゐゐゐゐ〳〵雪光暗夜を照して水の流るゐゐゐゐ〳〵しゐゐゐ〳〵〳〵〳〵余八人ゐ助けゐゐて高所ゐ逃登り避ゐ驛中を眺バ提灯炬を燈しゐゐ

大勢の男ども手ごとに木鋤をとりて雪を越水を渉て声をあげてこゝに来るもあれバ
水揚せざる所の者どもこゝに馳あつまりて川筋を開き水を落さんとするに闇夜ゆゑ
をぐハへえと女童の泣叫ぶ声或ハ遠く或ハ近く聞もおそろしきありさまなり燃
残りたる炬一ツをたよりに人も馬も首たけ水に浸り漲るながれをわたりゆくハ馬を助
んとするゝ帯もせざる女片手に小児を脊負提灯を提て高処へ逃のがるゝ近けれバ
をとこあらふにのち命とりがゝりとぞうかにをも恥しとハおもふべからず可笑事
可憐なるか可怖きなり穉くさなく筆に尽しがたくかうく東雲の頃に至り
て水も落たりとて諸人安堵のおもひをなしぬ○そもく我郷雪中の洪水大かたハ
初冬と仲春とにあり此関といふ驛ハ左右人家の前に一道づゝの流あり末ハ魚野川へ
落る三伏の旱にも乾くことなき清流水之なれバ家毎に此流を以て井水の代りとし
あるも桶にても汲べき流なれど平日の便利井戸よりもまさるに勝りあり初雪の
後十月のころまでにあの二條の小流雪の為に降埋られ流水ハ雪の下にあり故

に家毎に汲べき程に雪を穿て水用を弁ずこの穿る所も一夜の雪に埋らるゝこと
あれバ再うがつ事屡なり人家にちかき流さへかくのごとくなれバこの二條の流の
水源も雪に埋れ水用を失ふのミなられ水あがりの懼あるゆゑ所の人力を併て流
のかゝり口の雪を穿つなりされども人毎に業用にさへらるゝ時を失ふなり又ハ一夜の大
雪にかの水源を塞ぐ時ハ水溢て低所を尋て流る驛中ハ人の往来の為に雪を踏へ
して低ゆゑ流水漲り来り猶も溢て人家に入り水難に逢ふなり前にいへるがごとし
幾百人の力を尽して水道をひらかざれバ家財を流し或ハ溺死におよぶもあり○又
仲春の頃の洪水ハ大かたハ春の彼岸前後に雪いまだ消ず山々ハさら也田圃も渺々
たる曠平の雪面なれバ枝川ハ雪に埋れ水ハ雪の下を流れ大河といへども冬の初より
岸の水まづ氷りて氷の上に雪をつもり雪もおなじく氷りて岩のごとく岸の
氷りたる端次第に雪ふりつもりのちにハ両岸の雪相合して陸地とおなじ雪の地と
なりさて春を迎へて寒気次第に和らぎその年の暖気につれて雪も降止たる二月


雪中洪水の之圖


京水筆

の頃水気ハ地気よりも寒暖を知るゆえなきものゆえかの水面ハ積りし雪下より解て凍りし雪の力も水ハちろ〳〵ハ弱くなり流ハ雪ハ塞まて狭くなりくるゆえ水勢まもなく烈しく陽気を得て雪の軟なる下を潜り堤のきるごとく替ハいふ寝耳ハ水の災難ハあるゆ雪中の洪水寒国の艱難暖地の人憐めよ〳〵右ハ其一をいふのみ雪中の洪水地勢ハよりて種〳〵各〳〵あり詳ハ弁ずべし

○熊捕

越後の西北ハ大洋ハ対して高山ゆ東南ハ連山巍〳〵として越中上信奥羽の五ヶ国ハ跨り重岳高嶺肩を並べて数十里をゆ四方大小の獣甚多し此獣雪ハ避て他国へ去るもあり去らぬもあり動もして雪中ハ穴居をゆハ熊のごと熊膽ハ越後を上品とゆ雪中の熊膽ハことさらハ価貴し其重価を得んと欲して春暖を得て雪の降止るころ出羽あるいハ瞰師ども五七人心を合せ三四疋の猛犬を牽き米と塩と鍋を貯へ水と薪ハ山中在るハ随て用をゆ山より山を越昼ハ猟して獣を食

て夜ハ樹根岩窟を寝所とゆ生木を焼て寒を凌且明ゆ着てもく寝所をゆハ頭より足ハいるまで身ハ着る物悉く獣の皮をもつてこれを作る遠く視るハ猿ハ人也金華を往ハ人をやいふべき此者らゲ志所ハ我国の熊ハあるいさ我山中ハ入り場所よきを見立木の枝藤蔓を以て仮ハ小屋を作りこれを居所とゆ一ハ犬を牽四方ハ別て熊を窺ふ熊の穴居する所を認ハ目幟をのこして小屋ハ入り一連の力を併て犬を捕るその道具ハ柄の長さ四尺斗りの手鎗或ハ山刀を薙刀のごとく作りゆの鋏鉋山刀斧の類と刀鉄る時ハ鞘ハ入る砥をもつて自研ぐ此道具も獣の皮を以て鞘とゆハ此者ら春ハもかぎ〳〵ず冬ハ山ハ入るをもつもあり

そもく熊ハ和獣の王猛くして義を知る菓木の皮虫のるゆを食として同類の獣を喰ず田園を荒ず稀ハ荒ハ食の尽る時ハ詩経ハ男子の祥とし或ハ六雄将軍の名を得るも義獣ゆゑ〳〵夏ハ食をのゝ外山蛾を掌中ハ撮着冬

の蔵塾ゆへこれを謀て飢を凌ぐ牝牡同く穴ゆ警らべ牝の子あるハ子とも
じくとる其蔵塾なる所ハ大木の雪頽ゆ倒れて朽る洞なるか又ハ岩間土
穴なれども心ゆ随て居る処さまざまなり雪中の熊ハ右のごとく他食を求ざるゆ名その
膽の良功あるゆ夏の膽ゆ比べバ百倍と我国にてハ●飴膽●琥珀膽●黒膽と唱へ色を
ゆつくことをとゆ琥珀を上品とし黒膽を下品とし偽物ハ黒膽ゆ多し
●さて熊を捕ゆ種々の術あり かなら居所の地理ゆ考へて捕得ることハ
熊ハ秋の土用より穴ゆ入り春の土用ゆ穴より出ることゆ又一説ゆ穴ゆ入りてより穴を
出るまで一睡ゆ徑むるとゆ人の視ざるところなれバ信じがたし
沫雪の條ゆいへるごとく冬の雪ハ軟ゆして足場なきゆ熊を捕ハ雪の凍る春
の土用まへ穴より出んとする頃を揆る時節とするに岩壁の裾又ハ大樹の根
るゆ蔵塾なるを捕ゆハ壁とゆ術を用ふ天井釣とゆふものの制作ハ木の枝藤の
蔓ゆて穴ゆ倚掛て棚を作りたるの端ハ地ゆ付て抗を以て穴を縛りたるの

横木ゆ柱ありて棚の上ゆ大石を積ゆ横木より縄を下し縄ゆ輪を結ひて
穴ゆ臨ませ穴を蹴綱といふ此蹴綱ゆ轉機あり全く作りをりてのち穴ゆのぞし
で玉蜀黍粉糠の堂のるる熊の悪む物を林ゆ焼ゆ熊ゆ腐て烟ゆ穴を充ぬ熊烟りゆ
嘻て大ゆ怒り穴を飛出る時かるがるの蹴綱ゆ觸るるハ轉機ゆて棚落て熊大石
の下ゆ死を手を下さずして熊を捕の上術て是ハ熊の居所ゆよるとてハ樵夫
折ゆよりてハ考るなり
又熊捕の場数を踊る剛勇の者ハ一連の獵師を熊の居る穴の前ゆ待せ己一人
ひろく蓑を頭より被り（ハ山ゆある艸の名にて作るハ穴ゆそろりと這入り熊ゆ
搗よりなり）獵師共ゆこれを用ふ
蓑の毛を觸るハ熊ハこの毛を嫌ふものゆ多除て前ゆ考むる又後よりこの毛を障
熊又ゆ考むる又さらに又をんど熊終ゆハ穴の口ゆいることを視て待かまへる
獵師ども手練の鎗尖ゆうけて突留る一鎗失ることハ熊の一撲ゆ一命を失ふその危を
踊ど熊を捕ハ僅の黄金の為に金慾の人を過るの色慾よりも甚しさまべ黄金ハ

道を以て得べし道をもつて得べからざるを知り土穴を掘て蟄るもあり然れ
又上に覆ふ所あるもの下に雪のつもりぐさを知り土穴を掘て蟄るもあり然れ
どもてれも雪三五尺に吹積る熊の穴ある所の雪に入るゝ孔細孔ありて管のごと
こと熊の気息あるゝ雪の解るゝ孔之獵師こゝをうゝ見べ雪を掘て穴をあらゝ
木の枝柴のるゝを穴に挿入べ熊こゝを撲とりて穴に入るゝかゝるゝ去るゝ去べゝ
バ穴通りて熊穴の口にいづる時鎗にかゝる突きりとえべ数疋の猛犬いちどに飛かゝ
て嚙つく犬人を力とゝ人に犬を力とゝ殺もあり此術に控来ることりゝるゝと
なるなり

○白熊

熊の黒に雪の白ごとく天然の常なれども天公機を轉じて白熊を出せり
○天保三年辰の春我が住奥沼郡の内浦佐宿の在大倉村の樵夫に深山に入り
時にふゝして白き兒熊を虜り世に珍とて飼きにふ奇異師に見せもの
師の古風なるもの

こゝを買ひて市場又に祭礼をごとく人の群る所にて看物にせゝらある所に
余もてつるに大さ狗のごとく状に全く熊にして白毛雪を欺きたるも光澤ありて
天鵞絨のごとく眼と爪に紅さゝ人に則ゝたるゝ愛べきものゝごとか こに持
あるきゝゝ其の終をたゝべ白亀の改元白鳥の神瑞に八幡の鳩源家の旗をごと
白きに 皇国の祥象なるべ天機白熊をいづるゝ 昇平万歳の吉瑞なり

山家の人の話に熊を殺こと二三疋或に年歴たる熊一疋を殺も其山にのゝ
を荒るゝあり山家の人こゝを熊荒とゝのゝ多に山村の農夫に霜て熊
を捕るゝゝとゝ熊に霊あゝ事古書にもこゝとり

○熊人を助

人熊の穴に陰ゝ熊に助らるゝとゝの話諸書に散見ゝとも其実地をゝ
ゝる人の語りゝに珍けゝべゝに記を○余若りゝ時妻有の庄に奥沼郡の
用ありて両三日逗留せゝ事あり此頃に夏なりゝ多客舎の庭の木うげに

筵をもきく納涼居ゐ主人ハ酒を好む人にて酒肴をてゐ置き余ハ酒をバ
嗜ざるゆゑ茶を喫く居くりゐ一老夫てゐ来り主人を視て拱手て礼をなし
後園へ行んとせゝを主呼とめ老夫を指くいまゝ此典父ハ壮年時熊ゐ助られ
くる人ゝ危き命をたすけ今年八十二年で健ゐ長生ちるハ可賀老人ゝ識面ゐ
ありぬゝとゐふ老夫莞爾として再坐んとゝ余よびとめ熊ゐ助らまゝとハ珍
説く語りて聞せぬゝといひゐゐ主人余ゲ前ゐ在ゐ茶盌をとりくまバ一盃喫とて
酒を満盌とつぎけまバ老夫筵の端ゐ坐ゐ酒を視く笑をふくて続く三盌を
喫ゐ玄鼓して大ゐ喜びきくバ話説ゆきん我廿歳二月のそめ薪をとらんとて
雪車をひく山ゐ入りゐ村ゐちゝ所ハ皆伐つくしてまくあるも足場わゐ
ゆゑ山一重踰くゐるゐ薪とぞゝ柴あまたありゐゆゑ自在ゐ伐とり雪車所
うゝひるがゝ徐く束雪車ゐ積く縛つけ山力をさゝいと低ゐ随くゝ今来りく
方へ乗下りくるゐ一束の柴雪車より転び落谷を埋くる雪の裂隙ゐ入きまり

凍りゐ雪陽気を得て裂るゆ常ゝ　なるゆゑ捨く飯んも惜くまバその所ゐいくり柴の枝ゐ
手をうけ引上んとゝるゐもとゝも動ず落る勢ゐ撞いまくるゆんさくバ重
くゝより引上んと匍匐して双手を延ゝ一声うけく上んとゝる時足ゐ蹈力
ゐゝゆゑゐのまゝちくゐゐ己ゲ躰を轉倒雪の裂隙より遥の谷底へ墜けるゲ
雪の上を滑落くるゆゑ幸ゐ疵ハうけぞゝ夢のやうくゝゲやうくゐ心付
上をみまバ雪の屏風を建くるゲごとく今ゐも雪頽やせんと下ゐちゝ谷
生くる心地ハ為く噴ハくくゝせもてハ明方ゐいぞんと雪ゐ埋くる狭谷間をつゝ
やうくゐゐて空を見る所ゐいくりゐゐ谷底の雪中寒烈くく手足も亀手
一歩もまとびくくかくてハ凍死べくと心を励ゝ猶途もあるゝと百歩ぞくり行
くりけん滝ゐる所ゐいくり四方をみるゐ谷間の途極まく甕ゐ落くる鼠のごく
いんともせんもべく惘然とくく窮せまりいくぜんとゐふ思案さゝ出ざりゝさて
是より熊の話ゝ今一盃まくるべくとて自酌てきくりゐ喫腰より烟艸佛を

熊助捧夫之圖
牧之筆

老農の語を往事を圖
京水筆

いどーて烟を吹るゆゑ其次ハいろゆとさづけまべ老父曰さて傍を見まべ潛べ死わどの岩窟あり中ハ雪もあれゆゑ其ほとりて温と此時まて ろべきく腰をさべりとろ和握飯の弁當もいつ ゝまとーとりかくてハ飢死まべー さりゆべ〳〵雪を喰ても五日や十日ハ命あべーその内ろハ雪車哥の声さく聞まべ村の者と大声あげて叫らべ助くまべーそまふつけてもい伊勢さゆと善光寺さゆを いさのとゆーとりわろゆーと考りわ念佛唱へ大神宮をいのり日もくまかりし ゆゑ とゝを寝所わせべやと闇地を探りく這入りて又るわ次第わ温と猶も探りー手先わ障ーハ正ーく熊と愕然ーて胴も裂るゆうとーゞ逃わ道ゆくとても命の期ゆり死も生も神佛わまるまべーと覚悟をきゆわいろわ熊どの我ハ新とろわ来り谷へ落るものと飯ゆハ道ゆるく生て居ゆハ喰物ゆるーとても死べき命と擘て殺べとろ〳〵の情あべ助なまへと怖と熊を抚けまべ熊ハ起るやりとるゆゑあり〳〵がたべーありてもとをいべ我を尻ゆてかーゆるゆゑ熊の居る跡へ坐ーわそのあとゆる巨燵わあるごとく全身あたまりて寒をとゝまとーゆゑ熊わさあべく礼をのべ猶もなをけ玉へと種と悲ーゆるゆをいひゆわ熊手をあげて我が口へ柔わあーあてるゆなべくとーゆゑ城のゆをゆりべーて紙とくとべすくてもとーゆ苦ーゆゑ りわるゆとまべ心爽わゆり咽も潤ひーわ熊ハ鼻息を鳴ーて寝やうとまべハ我を助るゆゑんと心大わちつきのちハ熊と脊をゆべ〳〵卧ーゞ宿のゆをのこりゆて眠気もつべ〳〵ひーてのちハいつゝ寝入とりかくて熊の身動をもてゆわ見まべこゝまべ穴の口へゆるゆゑ夜の明ゆる残ゆり穴をとひいべーやうゆべき道もあるゆ山わのゆるべき藤づるゆもあるゆとあちこちゆまべゆるゆーー熊も穴をとひて滝壺わいとり水をのこーー時もとゆて熊を見まべ犬を七ツもとせゆるわどの大熊と又ひとの寇へまとりーゆゑ我ハ窩の口わ居て雪車哥のこゆやもとんと耳を澄ーて聞居とりーゞ滝の音のこゆて鳥の音もきゆべその月もゆ〳〵暮て又穴わ一夜をあゆーー熊の掌わ飢をもの〳〵幾日とゆても哥ゆきゆべその心細きゆひ〳〵んとゆーーさまべ熊ハ次第わ朝

可愛ゆゑ〳〵と語らひ主人は微醉ませ老夫婦は其熊は牝熊ではあり〳〵と三人大ひに笑ひ又酒をのませ盃の献酬はなぞ〳〵話消るを強て下回をなづけまゐ老夫曰人の心は物はふまとくかるものなれども熊は逢〳〵時はいかなるも死地なりと覚悟をばきため命も惜くはあり〳〵しかも熊は助らまそのちは次第は命をしくはあり助る人はあるとも雪さへ消るば木根岩角は縫てあり〳〵と宿へとらんと雪のきあるをのきまちとび幾日とのふ日さへ志て虚〳〵なるまでは熊は飼犬のやうはあり〳〵なれども〳〵人間の貫ゆを知り谷間の雪のきえるも里よりは遅〳〵なれば日のあたる所は蚤を刺て居ると〳〵時熊寄りてそ袖を咥て引〳〵あるいふなるとひきまはしふえとも滑落るかとりはいとり熊前はもとて自在は雪を掘一道の途をひらく何方までもとなびきけば又途をひらく〳〵人の足跡ある所はいとり熊四方を顧て走り去て行方もなきなれば我を導たると熊の衣一方を遥拝うもく礼をのべあまたまつさく神佛の御護をとか伊勢さゑ善光寺さゑを遥拝うまく〳〵て足の蹈所もあるべき火燵頃宿へとり〳〵は此時近所の人とあつまり念仏申てゆとり両親もとゞめ愕然せるを幽霊ゆうんとそ立さるべきものなれば月代は蓑のやうはのび面は狐のやうは痩とり幽霊とそ立さるべきものなれば笑とりて両親はさゝ人ゝもろこび薪とりはらべ〳〵四十九日目の待夜〳〵そいとるとる佛莫も俄はめべ〳〵酒宴とり〳〵と仔細は語り〳〵は九左門とりはは〳〵小間居の農夫さき其夜燈下は筆をとりて語り〳〵まを記〳〵はいまは〳〵今はむかし〳〵とありけり

○雪中の蚊

唐土蜀の峨眉山は夏も積雪あり其雪の中は雪蛆とのふ虫あるゆ山海経はゆえ〳〵の書此説空〳〵も越後の雪中はも雪蛆あり此虫早春の頃とり雪中は生下雪消終ば虫も消終る始終の死出を雪と同うも字音を按は蛆は腐中の蝿とあまば所謂蛆蝿こ蛆は蟲の類人を螫とあまば蜂の類こ雪中の虫は蛆の字は人〳〵べ〳〵とあまば雪蛆は雪中の蛆蝿也木火土金水の五行中皆為を生ぜ木の虫土の虫水の虫は常は見る所りづ

らしかるぞ蝿ハ灰より生ず灰ハ火の燼末なれバ蝿ハ火の虫なり蝿を殺して形あるもの灰中におけバ蘇る又蚤ハ人の熱より生ず熱ハ火なり火より生ずる虫ゆゑに蝿も蚤も共に暖なるをこのむ金中の虫ハ肉眼におよばざる冥塵のごとき虫ゆゑに人これをしらず、およそ銅銭の腐もじめハ虫を生ず生ずる所色を変ずべしこれを拭バ虫をころすゆゑ其所腐ずして錆ハ腐の始錆の中かならず虫あり肉眼におよばざるゆゑ人これをしらず蘭人の説に金中猶虫あり雪中虫無んやとおもひしども常をもつてみれバ奇とし妙として唐土の書にも記せり我越後の雪蛆ハちひさき蚊の如し此虫ハ二種あり一ッハ翼ありて飛行一ッハ翼なけれども蚑行す共に足六ッあり色ハ蝿に似て淡く一ハ黒し其居る所ハ市中原野蚊におなじしかれども人を螫むしにハあらずぞ験微鏡にて視る所をここに図して物産家の説を俟つ

○雪蛆の図

此虫夜中ハ雪中に凍死るがごとく日光を得れバたちまち▲

▲自在をうる又奇とすべし

色蒼し

○雪吹

雪吹ハ樹などに積りたる雪の風に散乱するをいふ其状優美なるものゆゑ花のちるを是に比して花雪吹といひて古哥にもおほくよみたり是東南寸雪の国の事也北方丈雪の国我越後の雪深きところの雪吹ハ雪中の暴風雪を巻騰て雪中第一の難儀これがために死する人年々その一ッを挙て下に記し寸雪の雪吹のやさしきを観人の為に丈雪の雪吹の愕眙を示す

余が住塩沢に遠からざる村の農夫男一人あり篤実にして善親に仕ふ廿二歳の冬二里あまり隔たる村より十九歳の娵をむかへしに容姿憎からず生質柔従にて糸織の伎にも伶利なれバ舅姑も可愛がり夫婦の中も睦く家内可祝春をむかへ其年九月のはじめ安産して而も男子なりけれバ掌中に珠を得たる心地にて家内悦びいさみ産婦も健に肥立乳汁も一子に余るほどなれバ小児も肥太り可賀名をつけて千歳と寿けり此一家の者いづれも篤実なれバ耕織を勤行小農夫なれど

も貧うして善男をもち良婿をもつて好孫をまうけうとて一村の人々常に羨み
かつる善人の家に天災を下さゞるハ如何ぞや○かくて産後日を歴てのち連日の雪
も降止天気穏なる日姉夫婦ハ今日ハ親里へ行んとありしかやせんとうかゝ男
旁に和ものそなハよく紀子へ男も行ゞ実母へも孫をゆだねよろこばせ夫婦しきり自
慢せんとて姉ハうちも名をつゞ姑に和くとの〳〵ハ姑ハ俄に土産など取そろへる間に取
髪をゆひなどして晴の衣類を著し綿入の木綿帽子も寒国の習として見わく
るゝ児を懐にいだき紀入んとせるに姑亭よりとく乳を呑せていざ紀いまよ途に
てハ祝ん祝ゞのこゆくるうんと一言の詞にも孫を愛する情ぞあるまこと夫ハ蓑笠
搞脚衣もんべを穿晴天にも蓑を著ハ土産物を軽荷に擔ひ両親に暇乞をなし
雪中農夫の常と
夫婦袂をつらね祝喜躍て立出ゝり正是親子が一世の別と後の悲難とハ知
けり○さるにてもこの夫ハ先に立妻ハ後にあとがひゆくをつとつまにいふ今日ハ頃日の
日和とよくこそあるひとゝ今日夫婦孫をつれて来るべしとハ親たちハまつ

まを玉ふまゝ孫の顔を見玉ひ〳〵よろこびのうんさまとハいひ父翁ハいつ
ぞや来らるとしが母人ハいまゞ赤子を見ぬハざるゆゑにこゝろの喜悦のうん遅
なるべし一宿てもよろこんの部も病ゆへ不可也二人とまりなバ両親業ゆうんまハ
飯ごしのごとくの間児の啼に乳房にまゝせつゝうちつまて道をいそぎ美佐嶋と
いへ原中に到る時天色倏急に変り黒雲空に覆ひけるハ是雪中夫婦の常と
大に驚怖こハ雪吹なるべしと跟蹤うち暴風雪を吹散る巨濤の岩を越
るごとく飈雪を巻騰て白竜峯に登ごとく朔風りしも掌をうゝもぐごとく天
怒地狂寒風ハ肌を貫の鏃凍雪ハ身を射の箭と夫ハ蓑笠を吹とゝ妻ハ帽子も
吹ちぎらるゝ髪も吹こゞさと吐嗟といへ間に眼口襟袖ハさゝゝ裾にも雪を吹いれ全
身凍呼吸迫り半身ハ已に雪に埋られて命のきゝりなバ夫婦声をあげ
てうゝと哭叫ども往来の人もなく人家にも遠けれバ助る人なく手足凍て
枯木のごとく暴風に吹僵れ夫婦頭を並て雪中に倒れ死けり此雪吹其日の

暮に止次日ハ晴天なりければ近村の者四五人此所を通りかゝりしに彼の死骸ハ雪吹
に埋られてミえざれども赤子の啼声を雪の中にきゝければ人々大に怪ミおそれて
逃んとするも在しが剛気の者雪を掘てみるにまづ女の髪の毛雪中に顕より扨ハ
昨日の雪吹倒れならん（里言にいふ所）とて皆あつまりて雪を掘死骸を見るに夫婦手を引
あひたく死居たり児ハ母の懐にあり母の袖児の頭を覆ひたれバ児ハ身に雪をハ
觸ざるゆゑにや凍死ぞ両親の死骸の中にて啼く又声をあげてなきたり雪中の死
骸なれバ生るがごとく見知る者ありて夫婦なることをしり我児をいだくやうに
袖をおほひ夫婦手をとるさまにて死する心のうちおもひやられてさすがの若者ら
も泪をおとし児ハ懐にいれ死骸ハ蓑につゝミ夫の家に荷ひ行しに此ふたりの両親ハ
夫婦娵の家に一宿とのミおもひをりしに死骸をみて一言の詞もなく二人が死
骸にとりつき顔にかほをおしあて大声をあげて哭けるハみるも憐のありさまなり一人
の男懐より児をいだして姑にわたしければ悲と喜と両行の涙をおとしける

とぞ
△里言に雪吹をふきといふことハ里言にあらず
雪吹の人を殺す事大方右に類す暖地の人花の散に比て美賞する雪吹と
其異こと潮干に遊びて楽と洪濤に溺て苦との如し雪国の難義暖地の人
おもひはかるべし連日の晴天も一時に変じて雪吹となるハ雪中の常也其力樹を
抜屋を折人家これが為に苦むこと枚挙がたし雪吹に逢たる時ハ雪を掘身を
其内に埋れバ雪暫時につもり雪中ハかへつて温なる気味ありて且気息を漏し
死をまぬがるゝ事あり雪中を歩行する人陰嚢を綿にてつゝむ事をせざれ
バ陰嚢まづ凍て精気尽る也又凍死たるを湯火をもつて温れバ助るといへど
も武火熱湯を用ふべからず命たすかりたるのち春暖にいたれバ腫病となり
良医も治しがたし凍死たるハまづ塩を熬て布に包みしばしば臍をあたゝめ搞火
の弱をもつて次第に温べし助りたるのち病を発せず（人肌にて温むもよし）手足の
凍たるも強き湯火にてあたゝむれバ陽気いたれバ灼傷のごとく腫ついに腐

雪中捕熊圖

農人夫婦逢雪吹圖

て指をおとせど百薬効なくして我が見る所を記して人に示す人の凍死するも手足の亀手も陰毒の血脈を塞ぐのゆゑ俄に湯火の熱を以て温ぶ人精の気血をたすけ陰毒一旦に解るとのべども全く去ず陰に陽に勝ざるを以て陽気至ば陰毒肉に暈て腐る寒中雨雪に歩行て冷る人急に湯火を用ふべからず已が人熱の温るゝをまつて用ふべし長生の一術なり

○雪中の火

世に越後の七不思議と称する其一ツ蒲原郡妙法寺村の農家炉中の隅石臼の孔より出る火人皆奇とす碑に誌す諸書に散見せり此火寛文年中始て出ると旧記に見えたるは三百余年の今に至て絶ることなく奇中の奇と天寿を出せり一ツ備後国の奥沼郡に又一ツの奇火を出せり天公の機状の妙法寺村の火とおなじ彼人の知る所是は他国の人の去らざる所なれば記て話柄とす

越後の国魚沼郡五日町より駅に近き西の方に低き山あり山の麓に小溝在天明年中二月の頃そのあたりに童どもあつまりてさるめぐりの戯をなして遊倦木の枝をあつめ火を焚てあたりをとりこめり其所より忽ちに別に火談ゝと燃わたりけるに児曹大に驚き皆四方に逃散けりその中に一人の童家に入り事の仔細を親に語るに此親心ある者にてその所に行て火の形状をみるに深さ消ざる雪中に手を入るべきほどの孔を穿て孔より三四寸の上に火燃る熟覧あるゝに正しく妙法寺村の火のごとし石臼を入れて火を消し家に入りて人に語ど雪きえてのち再その所に行てみるに火のもえたるあとの小溝の岸に火燵をなして裴燭に火を点じ試に池中に投いまだ池中火を出せるを庭燎のごとし水上に火燃るは妙法寺村の火よりも奇として駅中の人々来りてこれを視るそのち銭に才人かの池のほとりに混屋をつくり筧を以て水をとるごとくして地中の火を引き湯槽の竈

ふ燃し又燈火ゆも代る池中の水を湯ふ煙し價を以て浴せしむ此湯硫黄の気ありて能疥癬の類を治し一時流行して人群をなせり　○按ふ地中ふ水脉と火脉とあり地ハ大陰なる故ふ水脉ハ九分火脉ハ一分なりかるゆゑふ火脉ハ甚稀なる地中の火脉凝結ところかなるべく気息を当たる人の気息のごとく肉眼ふハ見えぬ火脉の気息ふ人間日用の陽火を加へバ見えて焔をなすことを陰火とのひ寒火とのひ寒火を引ふ筧の筒の焦ざるハ火脉の気いまだ陽火をうけて火となるべき気息なりなる故陽火をうくるバ筒の口より一二寸の上ふ火をなすことを以て火脉の気息の燃るを知るべし妙法寺村の火も是く是余ハ幾明ふあらバ古書ふ據て考得ん所と

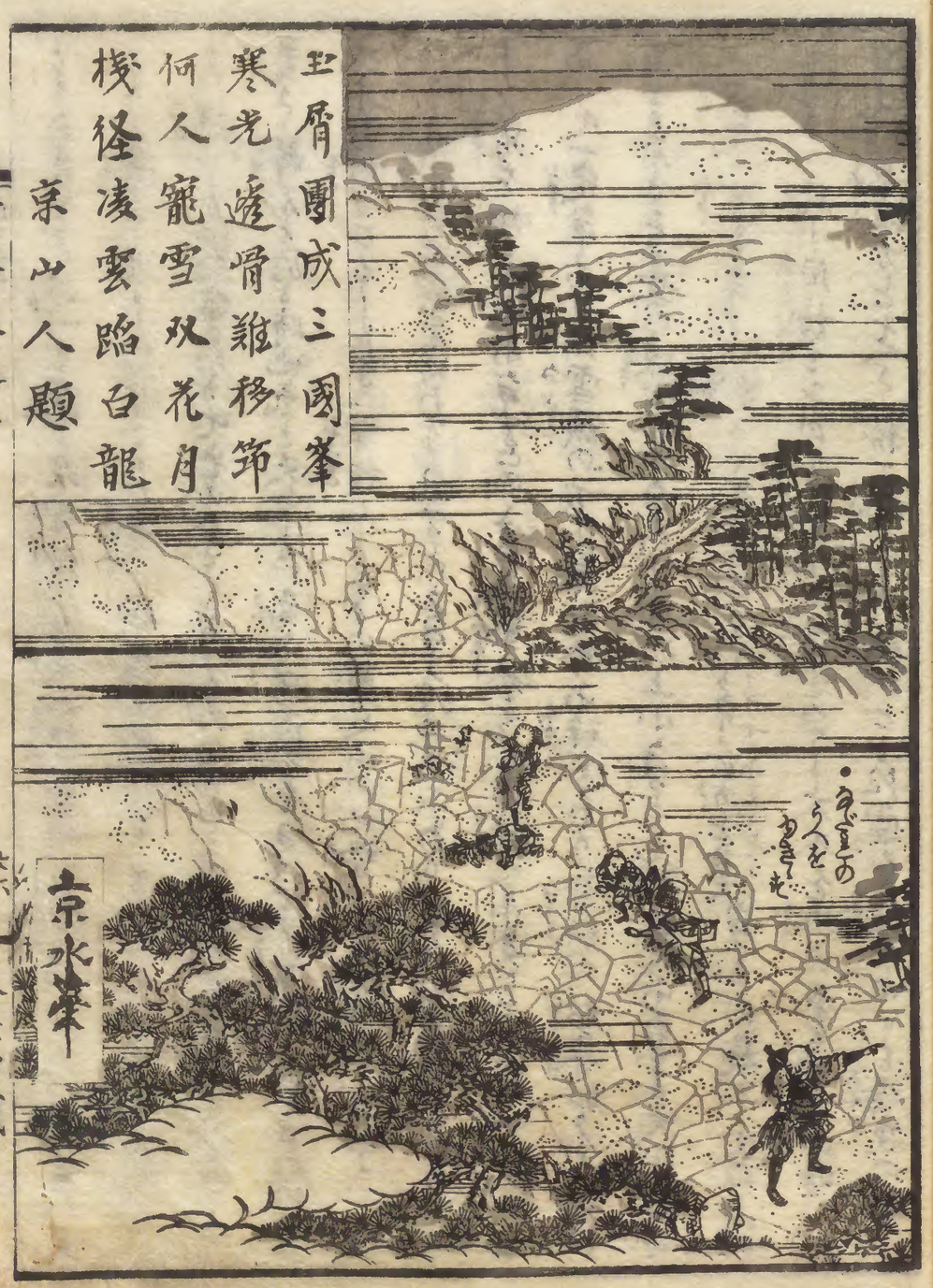
○破目山

魚沼郡清水村の奥ふ山あり高さ一里あまり周圍も一里あまりなる山中もべて大小の破隙あるを以て山の名とす山半ハ老樹條をつゝ林半より上ハ岩石疊ことして其形竜躍虎怒ごとく奇く怪く言ひつゝず蘖の左右ふ渓川あり合して滝をなすも絶景又言ひつゝ旱の時此滝壺ふ雪ふ埋るゝ験あり一年四月の半雪の消る頃清水村の農夫ら二十人あまり集り熊を狩んとく此山ふのぼりうの破隙の窟をゆ〻る所うるゆゑ熊の住處なるんと例の番椒烟草の莖を薪ふ交窟ふのぞんで焚こゝふ熊ハさゝふ出ず窟の深ゆ多ふ烟の奥ふ至ぬるゆんと次日ハ薪を増し山も焼よと焚るふ熊ハそもゝ一山の破隙ゝかゝとり烟をいどゝて雪の起ル如くなりけるバ寄異のおもひをなし熊を狩ずして空しく立ゝりしと清水村の農夫ら語りぬ此山半より上ハ岩を骨として肉の土薄く地脉気を通じて破隙をなゆゑ天地妙くの奇工思量ゝべし

○雪頽

山より雪の崩頽を里言ふなだれとのふ又なだれともいふ按ふなだれハ撫下るゝるを撫と云ふハ活用ことバなり山ふもいふことあり雪頽の字を借て用ふる字書ふ頽ハ暴風

三國嶺雪頼の上往來の圖



ともあるべしと叶つるやさて雪頽ハ雪吹ハ双て雪国の難儀とハ高山の雪ハ里より尤深く凍るも又里より甚しく我国東南の山〻里ハちかも雪一丈四五尺ゟ八浅〻とハ此雪こゝりて岩のごとくなるもの二月のころハいまだ陽気地中ゟ蒸〻解んとする時地気と天気との為ハ破て響をなす八一片破て片〻破る其ひゞき大木を折ごとく雪頽んとするの崩る山の地勢と日の照とハよりてゆだん〻処とゆだんなる処あり又ハ二月ハわり里人ハその時をわり処を知り崩を知るゆゑハ此の撃死るもの稀なり天の気候不意ハ一定なるべし雪頽の下ハ身を粉ハ砕まわり雪頽の形勢ハいんとなるべゆゑんとする雪の凍たの大なるハ十間以上小なるも九尺五尺ハあるる大小数百千悉く方をなす〻削りたるごとく下ハ軟なるの幾千丈の山の上より一度ハ崩頽るその響百千の雷をなす〻大木を折大石を倒す此時ハかならず暴風力をそなへ粉ハ砕る沙礫のごとく雪を飛せ白日も晴夜の如く

その慄〻たるの筆命ハ尽〻がたし此雪頽ハ命を捨る人命を拾る人我が見聞しるを次の巻ハ記して暖国の人の話柄とす

或人問曰雪の形六出なるハ前ハ弁ありて詳なり雪頽ハ雪の塊なるゆゑ砕るる形雪の六出なる本形をうしなふ方形ハいかん答て曰地気天ハ寒格して雪となるゆゑ天の円と地の方なるを併合て六出をなす八六出ハ円形の裏ゟ雪天陽を離て降下り地ハ飯ハ天陽の円き象らせて地陰の方なる本形ハ象るゆゑハ雪頽ハ千も万も圭角なるゆゑ解るゝとハ角円くなるゆゑ陽火の日ハてらさるゆゑ天の円ハよるゝ陰中ハ陽を包ミ陽中ハ陰を抱ハ天地定理中の定格なり老子経第四十二章ハ曰萬物負陰而抱陽冲気以為和とハこの理を以てなる時ハ内義なるもの内義なるゆゑハ陰中ハ陽を抱ぎて天理ハ叶ぬをなり〻ハ夫ハ代りて理屈をいハゞなるべし家内治ざるゆゑ理屈ハ過牝鳥且をつくるべきなるゆゑ

又家内の陰陽前後して天理に違ふ家の亡るもと萬物の天理誣べからざるなり かくのごとくしてひとたび問客唯ことごとくに太りの雪頼悉く方形のごとくなるもわづかに十ぶんの七八八方形をうしなふ故に此説を下せり雪頼の図多く方形に似たるものは甚七八をとりて模様を為るものを

消印

北越雪譜初編巻之上終

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan